論　文

大学の地域貢献に関する実践研究
－地域連携による子育て支援－

○古根川　円*1　梅木幹司*1

キーワード：地域貢献、子育て支援、子育ての悩み、座談会、産官学連携

1　はじめに

大学の地域貢献、地域連携は 21 世紀に入って以来大学の役割として広く聞かれるようになった。産官学連携は、共同研究や製品開発を民間産業と研究機関である大学が連携して行うスタイルである。しかし、産業だけではなく、福祉や教育の理念から大学として地域貢献や地域連携を進めることを目指し、本学では萩文化スポーツセンターの中に「地域子ども福祉研究所」を設置している。高齢化、少子化、共働き家庭の増加など、子育てに関する状況もひと昔前とは大きく変わってきた。今回、大学のある萩市と連携し、地域子ども福祉研究所として「子育て支援」に関わる機会をもつことができた。本研究では、親子の豊かな交流を促す方法や子育てをする中で生じる様々な悩みなど保護者の心に寄り添える方法等を検討するとともに、模索しながら実践した子育て支援講座について報告し、子育て支援の在り方について考察する。

2　子育て支援の在り方

2．1　子育て支援制度の現状

「子育て支援」という政策が本格的に始まったのは、1995 年度からのエンゼルプラン（「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」1994 年文部・厚生・労働・建設 4 大臣合意）、2000 年度からの新エンゼルプランに基づき、保育所の増設や延長保育、地域子育て支援センターの設置が進み、子育て支援が国の重点施策として位置づけられたからだ。2024 年に発表された、一人の女性が生涯に産む子どもの平均的な数

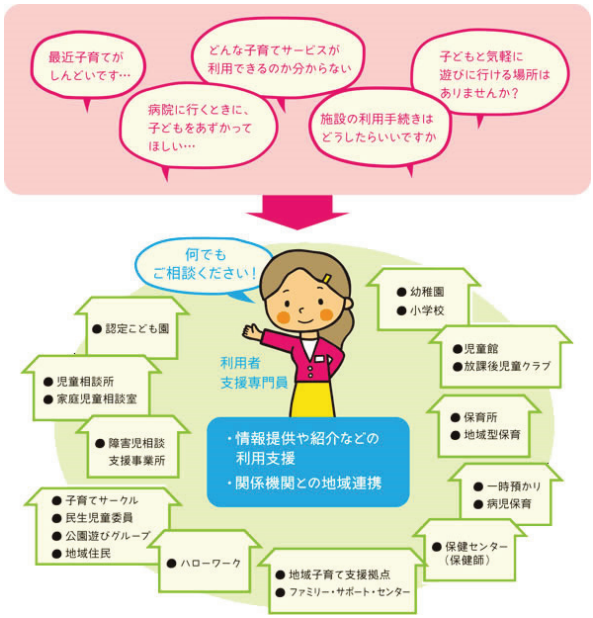

図-1　子育てに関する悩み事相談図 註1

を予測した指標である「合計特殊出生率」は、1.15 と過去最低を記録した。これまでの厚生労働省や文部科学省に分散していた子どもに関する政策を 1 本化するために、2023 年 4 月 1 日にこども家庭庁が創設された。こども家庭庁は、「こどもまんなか社会」の実現に向けた政府の司令塔として、幼児期までのこどもの健やかな成長のための環境づくりや、家庭における子育て支援等に関する基本的な政策を企画立案・推進している [1)]。また、全ての家庭が安心して子育てができ、子どもたちが笑顔で成長していけるように 2015 年 4 月から「子ども・子育て支援制度」が始まった。この制度は身近な市町村が主体となり、子育てに関する支援の量と質の両面から取り組むものである。図 1 は子育て中の悩み事をどこに相談すればよいか表したもの

*1　至誠館大学　現代社会学部

で、利用者支援として関係機関とつなぐものである。

２．２ 子育て支援の実践研究と新たな試み

太田 [2]は、過去の子育て支援の実践の蓄積の中で、「特に、保育専門家の相談や指導ではなく、子育てに関心を持つ支援者による子育て当事者に寄り添った居場所づくりや交流などが大きな支援効果をもたらした」(p.197)と述べ、利用者の視点に立った実践、すなわち「親が気軽に利用や相談ができる雰囲気や環境つくり」の重要さを述べている。以下では、保護者に寄り添った子育て支援を探求する上で重要な実践研究を検討するとともに、新たな試みとして導入した産官学連携について紹介する。

２．２．１　親子の豊かな交流を促す

島田ら [3]によれば、子どもとの触れ合い方の支援では、ベビィマッサージ、タッチケア、タッチカウンセリングなどがあり、それらは子どもに対する愛情の深まりや母親のメンタルヘルスの増進などに効果がある。また、今西ら [4]は、教員と学生による種芋の植え付け等の野菜つくりのイベントや音楽と絵本の読み聞かせ等が、子育て中の母親同士の交流やリフレッシュの場として有効であることを報告している。新川ら [5]は、「親子で行う砂遊びなど園庭や屋外での活動」、「親子で行う手遊びや絵本の読み聞かせ」それに「親子で行う体操やリズム遊び」などの項目が、子育て支援に関する利用者満足度の第一因子を構成することを示している。

２．２．２　親の子育て不安を軽減する

子育て不安を抱える親に対しては、Care プログラム、前向き子育てプログラム（トリプル P）など様々な心理支援プログラムが導入 [6][7]されている。これらは子育ての知識、技術などを学べるように構成されており、「具体的な子どもとの関わりスキルを学習することで、親の育児ストレスの低減につながる」[8]効果や「母親の問題解決を図る意識や自信につながる」[9]効果が指摘されている。しかしながら、専門家の指導を含むプログラムは、利用者の心理的抵抗を高める可能性がある。

利用者の抵抗感が比較的低いものとして親同士のピアサポートがある。島田ら [9]によれば、「母親同士のピアサポートは母親の孤独感からの解放や自己肯定感を高める効果」がある。小島ら [10]らは、初めての子育てで困難を抱えた母親のグループづくりを行い、定期的な話し合いを設けることで母親の自己肯定感が向上したと報告している。

加えて、保育学生の支援参加も母親のストレス軽減効果が大きい。太田 [11]は、学生が子どもと自由に遊び交流する取り組みへの親の評価が高い理由の一つは、親子が離れる場があるため親がホッとできるということ、もう一つは、「学生は指示や指導をしない、専門職然としたいわば『上から目線』ではない姿勢が、居心地のよい関係や空間を作り出している」ためであると述べている。笹尾ら [12]も子育て支援カフェの実施において母親の満足につながったのは、「家から出て外出をする機会や子どもと離れる機会を持つこと」であったと報告している。

２．２．３　親の多様なニーズに応える（産学官連携）

本学がある萩市内にも子育て支援の場は様々用意されている。図 1 で示した関係機関は全て網羅されている。今回、本学の地域子ども福祉研究所と萩市教育委員会文化・生涯学習課（中央公民館運営）、児童館の担当者が集まり、子育て支援の場に自ら求めて行くことができない方や、初めてだから抱える子育ての悩み等に寄り添える子育て支援の場にしたいと考え、企画立案を行った。

産官学連携の形をとることで、市の施設利用、他部署からおもちゃや遊び場マット、授乳スペースのテントなど物品の共有が可能になった。大学の地域子ども福祉研究所としては、保育の知識に裏付けられた親子の遊びの提供、子育ての悩みを子どもの発達の視点からアドバイス、保育学生をスタッフとして配置することができた。企業協賛は、「0～5 歳のお子さんとその保護者を参加対象とし、参加者に配布あるいは、試飲・

試食等ができるものをご提供いただきたい」と伝え 2 社から協力を得ることができた。このように呼びかけを行ったのは、子育て中に役立つ商品や、授乳中や子どもが飲んでも安全な商品を保護者に知っていただくという理由もあったが、第一の目的は子育て支援の場に気軽に立ち寄っていただく仕組みづくりであった。「試供品がいただけるから行ってみよう」というきっかけで、子育て支援の場に親子で出かけること、そして自分と同じ子育て中の方と知り合うことが、孤独になりがちな子育て中に大切であると考えた。

3　本研究の目的

本研究は、保護者に寄り添った子育て支援の実践として上記の「親子の豊かな交流を促す」「親の子育て不安を軽減する」「親の多様なニーズにこたえる（産学官連携）」の 3 つの視点から、ふれあい音遊び、座談会（親同士の話し合い）の開催、保育学生の参加、子育て応援ブースの設置等の内容を実施し、効果を検討し、今後の子育て支援に活かすことを目的とする。

4　子育て応援講座の実施

1) 講座タイトル「親 COCO 講座～子で育ち愛～」

講座タイトルは、主催者の文化・生涯学習課職員と協議を重ね決定した。案の段階では、案①大学生のお兄さん・お姉さんとあそぼう、案②お父さんの子育て支援講座～お母さんもいっしょに～等もあがったが、これから長く講座が続くことを想定し、「親子」が「ここ」に集ってほしい願いを込め、さらに COCO はフランス語でお気に入り、最愛の、という意味があることから「親 COCO 講座」と名称を決定した。

副題の～親子で育ち愛～は、今回は講座内容が「ふれあい音遊び」で音楽遊びを取り上げたが、今後様々な内容で講座を続けていくことができるように配慮した。

2) ねらい

保護者自身が子育てと仕事の両立を図り、前向きに子育てに取り組むことができるようにする。

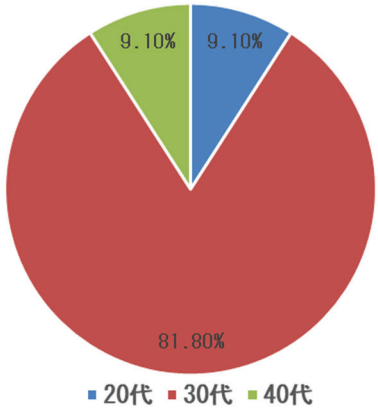

図-3　参加者の大人の年代

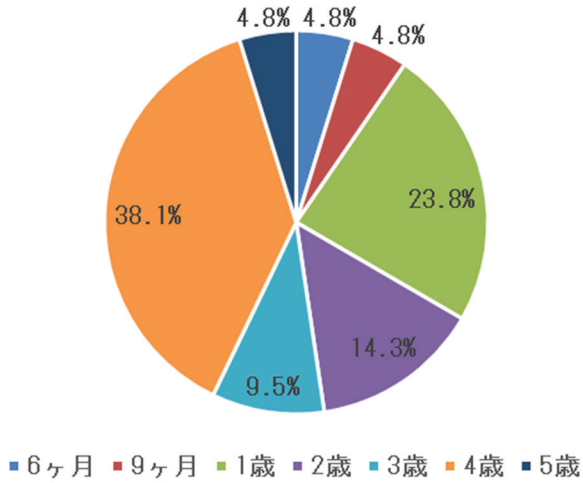

図-4　参加者の子どもの年齢（月齢）

3) 対象

0～5歳までのお子さんとその保護者

4) 日時

令和7年8月2日（土）10:30～12:00

5) 会場

萩市民会館小ホール・第1会議室

6) 講座内容

①ふれあい音遊び

13家庭（大人20名、子ども21名）の参加があった。参加者の構成は、保護者は30代が多く、子どもは6ヶ月から5歳までの幅広い年齢での参加であった。夏休み中の開催であったため、兄弟姉妹での参加も多く見られ

た。3歳未満児では、1、2歳児、3歳以上児では4歳の参加が多かった。

プログラム

1. ひっつきもっつき（ふれあい遊び）
2. いっぽんばしこちょこちょ（わらべうた）
3. ぞうきんのうた（ふれあい遊び）
4. あしあし　あひる（わらべうた）
5. うさぎとかめ（わらべうた）
6. いわしのひらき（手遊び歌）
7. なべなべそこぬけ、おしくらまんじゅう（わらべうた）

親子でヨガマットに座り、上記のわらべうたやふれあい遊び歌で親子のふれあい音遊びを行った。レジュメに3歳未満児と3歳以上児でやり方の違いを記し、実際に年齢によるバリエーションの広がりを説明しながら実践を行った。子どもの月齢・年齢によっては、寝転がって行うことを恥ずかしがる年齢もあり、子どもの0～5歳の幅にあわせて、事前に何通りかのバリエーションを準備する必要があった。0、1、2歳児の保護者とのふれあい方と、4、5歳児のふれあい方は違いがあるが、4、5歳児にとっては赤ちゃんのように親とふれあうことも、恥ずかしながらも楽しそうであった。

②座談会（子育て講座）の実施

参加者のべ人数は15名であった。のべ人数としたのは座談会中の参加者の出入りの動きがあった為である。参加者は同じフロアにある第一会議室に移動し、円形に座り事前アンケートにより聞き取り調査を行ったテーマごとに、お互いの子育てについて共有した。事前アンケートは講座申し込みと同時に、アンケートフォームで行った。

アンケート内容

質問は「子育て中の悩み」と今後復職を考えている保護者を想定し「子育てと仕事の両立をはかる中で困っていること」の二通りで行った。

Q.　子育ての中で、どんなことに悩まれていますか。（複数選択可）

- 生活リズム（早寝・早起き）
- メディア（テレビ、動画視聴、スマホ、タブレットなど）
- トイレトレーニング
- お子さんが病気やケガをしたときの対応
- お子さんとふれあう時間の確保
- お子さんの兄弟（姉妹、兄妹など）の関係
- お子さんの夜泣きや自身の睡眠不足
- 経済不安（学費、食費、医療費など）
- 相談相手がいない
- その他

Q.　子育てと仕事の両立をはかる中で、困っていることはどんなことですか。（複数選択可）

- これから復職予定で、今後の生活
- 生活リズム（早寝・早起き）や時間調整
- メディア（テレビ、動画視聴、スマホ、タブレットなど）
- 食事（朝食、偏食、好き嫌いなど）
- トイレトレーニング
- お子さんとふれあう時間の確保
- お子さんの夜泣きや自身の睡眠不足
- お子さんの兄弟（姉妹、兄妹など）の関係
- お子さんの送迎
- お子さんが病気やケガをしたときの対応
- 経済不安（学費、食費、医療費など）
- 職場の理解
- 相談相手がいない
- 特になし
- その他

アンケート結果

表1のように、「子育て中の悩み」は回答数の多いものから、「食事（朝食、偏食、好き嫌い）」「メディ

表-1 事前アンケート回答数

子育ての中でどんなことに悩まれていますか（複数選択可）n=21	全回答に占める割合(%)	子育てと仕事の両立をはかる中で、困っていることはどんなことですか。（複数選択可）n=19	全回答に占める割合(%)
食事（朝食、偏食、好き嫌いなど）	28.6	お子さんとふれあう時間の確保	26.3
メディア（テレビ、動画視聴、スマホ、タブレットなど）	14.3	お子さんが病気やケガをしたときの対応	21.1
お子さんが病気やケガをしたときの対応	14.3	これから復職予定で、今後の生活	21.1
お子さんとふれあう時間の確保	9.5	生活リズム（早寝・早起き）や時間調整	5.3
お子さんの兄弟（姉妹、兄妹など）の関係	9.5	食事（朝食、偏食、好き嫌いなど）	5.3
トイレトレーニング	4.8	お子さんの兄弟（姉妹、兄妹など）の関係	5.3
経済不安（学費、食費、医療費など）	4.8	職場の理解	5.3
その他 仕事との両立で土日をうまくコミュニケーションがとれているか不安	4.8	その他 小1の壁が未知なので不安	5.3
その他 内向的な子どもで相手に気持ちが伝えるのが苦手（家庭内はOK）	4.8	その他 上の子に障害があり、手がかかるため仕事とのバランスが難しい	5.3
その他 ミスを指摘された場合の気持ちの切り替えが苦手ネガティブ	4.8		

ア（テレビ、動画視聴、スマホ、タブレットなど）」「お子さんが病気やケガをしたときの対応」と、健康面での心配が多いことが分かった。

「子育てと仕事の両立をはかる中で困っていること」の質問では、回答数の多いものから「お子さんとふれあう時間の確保」「お子さんが病気やケガをしたときの対応」「これから復職予定で、今後の生活」と、現在復職されている方と今後復職を考えている方の意見として、仕事と両立するうえで子どもとの時間確保を心配されていることがわかった。

「子育て中の悩み」と「子育てと仕事の両立をはかる中で困っていること」の両方を通じて、今回の参加者が日々の子育て全般の悩み、心配事として捉えている項目は表２の結果となった。

座談会の進行

座談会では椅子を円形に並べ着席して行った。その間、子どもたちは児童館職員2名と学生スタッフ5名が

表-2 子育て全体を通しての悩み・心配事上位5位

子育て全体を通して	回答数に占める割合 (n=40)
食事（朝食、偏食、好き嫌いなど）	17.50%
お子さんとふれあう時間の確保	17.50%
お子さんが病気やケガをしたときの対応	17.50%
これから復職予定で、今後の生活	10%
お子さんの兄弟（姉妹、兄妹など）の関係	7.50%
その他	30%

さまざまなおもちゃで自由に遊んだり、学生による大型絵本読み聞かせや紙芝居などの企画に参加したりすることで、母親から離れ遊ぶ時間を作った。

途中、子どもが気になる保護者は見に行ったり、戻ったり自由に動いて良いことを伝え行った。座談会のテーマは、表2の5つに絞り事前にQRコードを作成し、テーマごとに自分が行っていること、知っている情報、感じていることなどをスマートフォンで打ち込む形で行った。

今回は打ち出された回答を司会者が読み上げたり、全体に問いかけ挙手を促したり、ファシリテーター役となり座談会を進めた。この方法で回答した内容は、本人を特定できないため自由に発言できるメリットがある。また、より具体的に悩みを書くことや、回答せず他の保護者の意見を聞く側に徹することができる点も、個々に負担をかけず進行できた点が良かったと感じる。今後、参加人数や参加者の関係性で様々な方法が考えられる。

③子育て応援ブースの設置

子育て講座において企業と連携し実施するのは今回が初めてであったため、児童館職員の紹介で2企業を選定した。両企業には、0～5歳のお子さんとその保護者を参加対象とし、参加者に配布あるいは、試飲・試食等ができるものをご提供いただきたいと伝えた。コープやまぐちからは、0～5歳を対象としたお菓子等を可能な範囲で準備していただき、TOT Gardenからは、妊娠中あるいは授乳中の方も安心して飲むことができるノンカフェインのハーブティーの試飲を準備していただいた。

「生活協同組合コープやまぐち」

・ミックスキャロット（にんじんジュース）

・お子様向け麦茶

・野菜バー

「TOT Garden」

・ハーブティーの試飲

「生活協同組合コープやまぐち」は、「やまぐち子ども・子育て応援コンソーシアム」の加盟企業であり、妊娠中から7歳までの子育て家庭に「ここサポ」[註2]制度を設け、宅配料のサービスなど子育て支援を実践している企業である。「TOT Garden」[註3]は自然豊かな山口県萩市で自家製ハーブやこだわりの素材を使ったオリジナルブレンドのハーブティーや地元産のおいしいフルーツを使ったドライフルーツを作っている地元企業である。

④保育学生の参加

大学の地域貢献における講師としての協力だけでなく、大学で保育を学ぶ保育学生5名（4年生3名、1年生2名）が参加した。全員保育士資格と幼稚園教諭免許状取得をめざす学生で、4 年生は全ての実習を終え半年後には保育現場で働くことが決定している人材を起用した。

保護者の座談会の際、親子が離れる場面があるので、

子どもの安全面を第一に見守ることを徹底した。自由遊びと並行し、大型絵本「おばけのてんぷら」の読み聞かせ、オリジナル紙芝居、手袋シアター、手遊び等を準備し、子どもの興味によって参加ができるよう配慮を行った。子どもたちは、怪我がなく様々な遊びを集中して行っていたため、保護者の座談会もスムーズに行うことができた。

5　講座の評価

講座全体のアンケートの感想は以下の通りであった。

・座談会でいろいろな意見が聞けてうれしかったです。
・他のお母さんのご意見も聞けて参考になりました。
・他の家庭のリアルな育児が知れてよかったです。
・みなさんの悩みが聞けて良かった。子どもを完全に預けられた。
・親子で遊ぶ時間も、他の方の体験を聞く時間も、それぞれ楽しかったです。子どもを遊ばせていただいてありがとうございました。
・子どもも一緒に参加できてよかったです。
（註：アンケート文面をそのまま活字にしている）

6　考察

大学のある萩市内でも様々な子育て支援の取り組みが実践されている。参加のしやすさ、参加したことで子育てに前向きになれる仕組みづくりが今回の鍵であった。子育てする親を孤立させない、子育てはこうあるべきであるという固定観念に縛られない、それぞれの家庭、ライフワークに合わせた子育てがあることを知り、子育てや働きながらの子育てに前向きになり、親としての自己肯定感を高めることが子どもの心身の成長に必要だと考えられる。自由記述アンケートに「座談会でいろいろな意見が聞けてうれしかった」、「他のお母さんのご意見も聞けて参考になった」、「他の家庭のリアルな育児が知れてよかった」、「みなさんの悩みが聞けて良かった」などとあり、対話の大切さを改めて確認することができた。

また今回初めて地元企業に参加を求め、子育て応援ブースの設置をしたが、受付を済ませた参加者は、会場に入り自由にブースを見て試供品を受け取り、試飲をすることで自然な会話が生まれている様子が見られ、気軽に参加する雰囲気を生み出すことができたと感じる。加えて、保育学生が子どもたちと遊び、絵本の読み聞かせなどを実践することで、子どもと離れ大人の時間がもてたことも心の休息に繋がっていたと考えられる。保育学生も親子との関わりや、親がいる中での子どもと遊ぶ機会は少ないので、日ごろの学びの確認の場として貴重な機会になったと感じた。

先行研究では、子育ての親の知識やスキルの向上は親の自信や子育てへの意欲を向上させることが示唆されている。本研究では、そのための心理支援プログラムの導入などは行わなかった。しかしながら、親子が自由に遊びに来て親子あるいは親同士が交流する場では、「それぞれの親は自分が知りたいことや困っていることなど必要な情報を自ら学び取っていると考えられる。」[13] 従って本講座の場は、子育ての自信や意欲を培うのに良好な環境であったと考えることもできる。

今後の課題として、大学としての地域貢献・地域連携を一度だけのイベントにせず、継続し続ける工夫と努力を怠らないことが課題である。さらに、子育て世代の抱える悩み等推移やデータ分析を行い、地域に還元していくことも大学としての責務であると感じる。また、子育ての悩みに関する事前アンケートで回答された少数意見に対しても、必要な支援を届ける仕組みの構築が今後の課題である。

7　おわりに

本稿では、大学の地域貢献と地域支援として産官学連携を含めた子育て支援を検討してきた。今日の地域が抱える課題は、多様化、複雑化、複合化している。また、大都市、地方都市にそれぞれ共通した生活課題もあれば、地域独自の生活課題も存在し、従来の福祉

の枠組みに留まらない支援のあり方が求められている。したがって、今回の子育て支援講座の取り組みは、従来の枠組みに留まらない子育て支援のあり方を提示することができたとも言える。

謝辞

本研究にあたり、萩市教育委員会文化・生涯学習課社会教育主事中野裕之様、萩市児童館中坪志野様、生活協同組合コープやまぐち山本翔太様、TOT　Garden 刀禰智恵様など、多くの方々に大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

［註］

註 1 こども家庭庁ホームページより利用者支援図 http://www.cfa.go.jp（アクセス日 2025.9.4）

註 2 生活協同組合コープやまぐち（1963）「子育てサポートクラブ『ここサポ』」https://www.yamaguti-coop.or.jp/cocokuru/cocosapo/（アクセス日 2025.9.8）

註 3 TOT Garden https://totgarden.base.shop/（アクセス日 2025.9.8）

［引用文献］

1）こども家庭庁（2023）「こどもまんなかこども家庭庁」http://www.cfa.go.jp（アクセス日 2025.9.4）

2）太田光洋（2024）「子育て支援の充実と研究の広がりー精緻化する支援とそれを支える研究可能性ー」『教育心理学年報』63, 194-206

3）島田葉子・杉原喜代美・橋本実理（2019）「育児ストレスや育児不安、育児困難を抱える母親への育児支援の実際とその効果についての文献レビュー」『足利大学　看護学研究紀要』7(1), 69-81

4）今西誠子・杉山智春・藤本美穂（2025）「大学生と教員における育児支援事業の取り組みについて」『健康医療学部紀要』10, 25-30

5）新川泰弘・榎本祐子・李政元（2023）「地域子育て支援拠点の支援内容」に関する利用度満足度とソーシャルワーク的役割期待との関連性－コロナ禍による心理社会的状況の変化に着目して－」『子ども家庭福祉学』23(0), 34-47

6）波光涼風, 清水寿代, 尾形明子（2025）「子育て不安を抱える親に対する子育て支援プログラムの実践報告：地域社会での CARE プログラムの実施」『広島大学教育学部共同研究プロジェクト報告書』23, 77-84

7）肥田佳美　ほか（2019）「Trip P（Positive Parenting Program）の実践と評価―東海市における取り組み」『保健師ジャーナル』75(4), 315-320

8）前掲　6）

9）前掲　3）

10）小島康夫・志澤美保（2014）「初めての子育てに困難を抱えた母親を対象とした支援プログラムの効果 愛知県豊山町における実践」『小児保健研究』 73(2), 215-224

11）前掲　2）

12）笹尾あゆみ　ほか（2016）「北海道科学大学が提供する地域子育て支援活動」『北海道科学大学紀要』41, 213-216

13）前掲　2）

［参考文献］

1）鬼塚史織（2018）「子育てグループにおける母親の子育てに関する意識や態度の変化：育児不安・母親としての意識・居場所に着目して」『家族心理学研究』31（2）, 89-102

① ふれあい音遊びの実施

② 座談会（子育て講座）

③ 子育て応援ブースの設置

④ 至誠館大学地域子ども福祉研究所との連携

図-2　講座の様子

University's Community Engagement and Regional Collaboration －Report of the Regional Institute for Child Welfare Studies－

Madoka KONEGAWA　Motoshi UMEKI

abstract : This paper examines the university's community contribution and regional support, focusing on child-rearing support programs implemented through collaboration among industry, government, and academia. Local communities today face diverse challenges, calling for support systems that extend beyond conventional welfare frameworks. The child-rearing support activities conducted in this study revealed common concerns shared by today's generation of parents. It was also found that when parents shared their concerns and listened to each other's experiences in child-rearing, their attitudes became more positive.